

第5章 ボランティアと教育プログラムの課題

—Reflective Approachの可能性—

1. 学生が学びの舞台に上がる瞬間

ボランティア活動が活動者の自発的行為としてだけでなく、活動者の学びや成長との関連で語られる機会が増している。ボランティア活動と教育というややジレンマを包含したテーマであるが、とりわけ高等教育における社会体験や社会貢献の教育プログラムとしてボランティア活動への関心の高まりが近年の特徴である。ボランティア活動が学生の学びと成長にどのように関連するか、その課題や可能性について少し記しておこうと思う。

学生が学びの舞台に上がる瞬間とはどのような時であろうか。実証的に示す統計材料は手元にないが、学生が自ら問題意識を持ち、主体的に課題に取り組んだときに生じる認識の高まりや感動、驚き、あるいは挫折や葛藤、後悔といった成功や失敗のリアリティある体験が、学生の確かな成長ポイントとなっているのではないか、という実感はある。教学へのコミット感と自己効力感が学生生活満足度の2大要素という調査結果（2004年、ベネッセコーポレーション）もあったが、知識蓄積型の教育手法だけでなく、現場に足を運んで手に触れ目で見て耳を傾けるといった直接体験による衝動刺激型の教育のもつ今日的な有効性を示しているといえよう。こうした成長ポイントを成す機会や場面をキャンパス内外に以下に設定することが出来るかどうか。「体験型学習」のコアをなす課題であり、また「体験型学習」のもつ優位性である。

立命館大学のボランティアセンターはこうした状況を見据えつつ、2004年に開設された。翌05年には本稿のフィールドである「地域活性化ボランティ

ア教育の深化と発展」という教育プログラムが文部科学省の現代GPに採択されたが、審査ヒアリングの際に、学生総数3万人を超える総合大学でのボランティア教育の体系化に特段の期待が示されたという。

体系化とは、正課・課外でのプログラムの豊富化、カリキュラムの構造化、導入期の取り組み、専門との接合、教材・教具・手法の開発、等として検討されるべき内容である。幸い本学には関連する貴重な教育実践が豊富にあり、事例には事欠かない。これらの到達や成果を教育資源として全学で共有することが何より重要である。ボランティア教育という視座からの学内における教学資源の再構成や可視化の作業であるが、講義・演習・実験等伝統的な教授法に加えて、体験的に学ぶ、参加して学ぶ、地域で学ぶ、貢献して学ぶ、等々といったボランティア／サービス・ラーニングが高等教育に如何様な正当性を主張しうるのかという課題でもある。教育環境や条件整備の課題もこの問い掛けから始まるはずである。立命館大学のボランティアセンター教学を素材にボランティアと教育プログラムの関連課題について検討してみたい。

2. 地域活性化ボランティア教育の深化と発展

2005年度に現代GPに採択されたプログラム「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」は、上記のボランティアセンター開設にこめた本学の学生の学びと成長の動力としてのボランティア教育の本格的な展開を目指したものとなった。その概略は、学生の学びと成長を、一つには正課と課外を相補性あるものとして連結し、二つには内容での入門から応用までプログラミングし、講義科目・サービスラーニング科目・課外自主活動支援などのコンテンツを第1段階から第3段階まで体系化したものである。

現代GP採択を受け、2005年度からボランティアセンターが開講する正課科目群の拡充を図ってきたが、全体像は表1に見るように、GP完成年度の2008年度には京都（KIC）・滋賀（BKC）両キャンパス10学部全ての学部で、それぞれ8科目16単位の正課科目のほとんどが、各学部のカリキュラム構造

表1 2008年度ボランティアセンター開講科目予定一覧

・2008年度開講科目一覧（案）

<衣笠キャンパス>

GP	科目名		単位	クラス数	受講定員	
第1段階	地域参加活動入門		2	1	400	
第2段階	地域活性化ボランティア		2	KIC・BKC合併		
	ボランティア コーディネーター養成プログラム	社会とボランティア	10単位 バック	2	1	60
		ボランティアマネジメント論		2	1	
		ボランティア情報・調査演習		2	3	
		ボランティア活動支援演習		2	3	
		ボランティアインターンシップ		2	1	
第3段階	演習（教養ゼミ）		2	2	20～30	

<びわこ・くさつキャンパス>

GP	科目名		単位	クラス数	受講定員	
第1段階	近江・草津論		2	1	400	
第2段階	地域活性化ボランティア		2	KIC・BKC合併		
	ボランティア コーディネーター養成プログラム	社会とボランティア	10単位 バック	2	1	40
		ボランティアマネジメント論		2	1	
		ボランティア情報・調査演習		2	2	
		ボランティア活動支援演習		2	2	
		ボランティアインターンシップ		2	1	
第3段階	演習（教養ゼミ）		2	2	20～30	

に位置づけられて開講される予定である。キャンパスの特徴や経緯の違いによって時間差はあるが、両キャンパスにシンメトリーに配置する構造となっている。

i. 第1段階＝導入での動機付け

まず第1段階では、学生のボランティア活動や地域参加への動機づけを課題とする。「地域参加活動入門」（前期2単位）を正課科目として配置している。1回生を中心に、ボランティア活動や地域社会への興味・関心を広げ、地域参加への導入としての位置づけにある。多彩なゲストスピーカの配置や具体的な活動にも体験的に参加することも出来るものとして組み立ててい

る。BKCの『近江草津論』（後期2単位）はキャンパスが立地している近江・草津の地域環境を知るという内容でBKC教養科目として開講されてきたものを、KICでの「地域参加活動入門」と同様の第1段階の導入期科目という趣旨に再編しながらボランティアセンターが責任を持つ科目と開講する方向で準備している。

第1段階の課外活動支援は、ボランティアセンターのさまざまな事業を通して恒常的に実施されている。広報は、HPやパンフレット、ニューズレターの発行はじめ、入学時には全ての新入生約9千人に対しボランティアセンター関連パンフを配布し学内での認知を高める努力を行っている。活動先紹介では、学内外のボランティア団体・機関の協力を得て、ブース形式でボランティア活動と団体を知らしめるボランティアガイダンスを入学時と夏休み前に開催している。こうした課外活動への支援は、第1段階から第3段階を通して恒常的に実施されるが、入門から応用までという各段階の課題に即した系統的支援策の開発が急務となっている。

ii. 第2段階＝コアプログラムの展開

第2段階では、ボランティア教育のコアプログラムが本格的に展開される。

この段階の取り組みで、特筆すべきは、「ボランティアコーディネーター養成プログラム（Volunteer Coordinator training program VCTP）」である。これは、本学と京都市社会福祉協議会、財団法人キリン福祉財団との産官学連携によって1999年から始まり、本学ボランティアセンター設置の契機とな

図1 ボランティアコーディネーター養成プログラム（VCTP）カリキュラム

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
第6時限 18:00～19:30	「社会とボランティア」 (講義)				夏期 休暇	「ボランティアマネジメ ント論」(講義)				修了レポート・提 出		修了 式
第7時限 19:40～21:10	「ボランティア情報・調 査実習」(演習)					「ボランティア活動支援 演習」(演習)						
ボランティアインターンシップ(90時間)												

ったプログラムである。プログラムは図1の通り、毎週火曜（KIC）、水曜（BKC）の6限目・7限目に開講し、「社会とボランティア」（前期2単位）「ボランティアマネジメント」（後期2単位）の講義課目、「ボランティア情報・調査演習」（前期2単位）「ボランティア活動支援演習」（後期2単位）の演習、そして90時間の「インターンシップ」（夏季集中2単位）という5科目10単位をワンパックにしたものである。そして何よりの特徴は、この分野での活動実績のある社会人も受講生として受け入れ、学生と共に学びあう仕組みをつくり上げていることである。学生も地域に出て学び、地域もまたキャンパスの中で学ぶ、新しい知的相互作用の営みである。受講生は5科目10単位を修了し、且つ4千字以上の修了論文を執筆した後に、修了証を渡される。

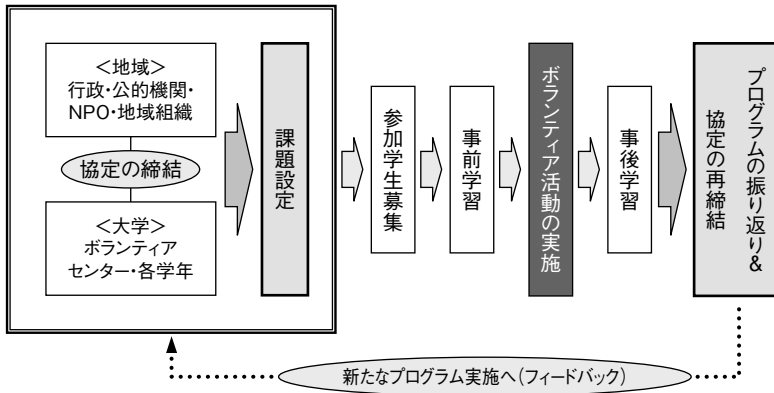
第2段階には正課科目をもう一つ配置している。サービス・ラーニング型の「地域活性化プログラム」（通年2単位）であり、この科目は現代GP採択

表2 地域活性化ボランティアプログラム一覧（2007年度実施）

地域活性化ボランティアプログラム先一覧

	プログラム名称（名称は2007年度）	活動先	受入団体（名称は2007年度）	2006 年度	2007 年度
1	都市と農村の共生：里山保全と農山村からの情報発信	京都府綾部市	NPO法人 里山ねっと・あやべ	○	○
2	都市と農村の共生：笹葺き古民家再生	京都府宮津市	NPO法人 美しいふるさとを創る会	○	○
3	障害のある子どもたちと、地域をむすぶ「放課後ほっこり」	京都市	京都市立西総合支援学校 支援部	○	○
4	環境保全と伝統文化：百人一首のふるさと小倉山復活	京都市右京区	NPO法人 教育文化芸術振興協会	○	○
5	子どもによる、子どものためのまち創りを手伝おう！「チャキッズタウン」企画・運営	京都市下京区	京都市下京青少年活動センター	○	○
6	あなたも京都伝統文化継承の担い手になれる！時代祭応援	京都市中京区他	平安講社第八社	○	○
7	湖東地域の里山文化に光をあてよう！しゃくなげ学校展示室づくり	滋賀県蒲生郡	NPO法人蒲生野考現倶楽部		○ →中止
8	地域の良さを活かして発信！町屋活用地域交流イベント企画	滋賀県近江八幡市	しみんふくし滋賀		○
9	琵琶湖に浮かぶ島でまちづくり！ふるさと絵図作成	滋賀県東近江市/近江八幡市	NPO法人蒲生野考現倶楽部		○

図2 地域活性化ボランティアの実施プロセス



によって新たに開発したプログラムである。この科目で提供されるプログラムは、地域の諸団体が主催する様々な取り組みに、地域諸団体の指導や援助を組織しながら学生が直接参加し、その目的達成のためのアクションを起こしていくことを想定している。2007年度実施のプログラムは、表2のようにまちづくりや里山保全、伝統文化継承など8プログラムとなったが、その実施プロセスを図2にて概略紹介してみる。

このプログラムはまず、京都府下、滋賀県下の行政や公共機関・施設、NPO、住民組織などと、相互連携の協定を締結してから実施される。協定締結後に、具体的なプログラムを目標や課題、時期、定員、参加形態などを明示したシラバスを学生に提示し、参加する学生募集を始める。事前事後の学習は連携先の協力も得ながら、本学教員が責任を持って行う。事前では、プログラムの概要説明と学生の受講動機の明確化や個別の目標・課題の設定等が講義と演習、個別指導の形態で行われる。活動修了後は、振り返りのための事後学習の場面をつくる。さらに、参加学生はもちろん連携先の地域関係者も参加しての報告会を開催してプログラムを終了する。

iii) 第3段階＝支援される側から支援する側への学生のロールチェンジ

第3段階は、導入期や展開での学習プログラムを受講した学生や、課外で

の活動に取り組んできた学生が、ボランティアセンターが提供する正課・課外プログラムの開発や運営に直接関わりつつ、学びを深め成長していく段階である。支援される側から支援する側への学生のロールチェンジの意識的な創出という「学びの循環」の段階である。これは、現代GP完成期の主要課題であるが、学生コーディネーター制度など一部はすでにスタートしている。

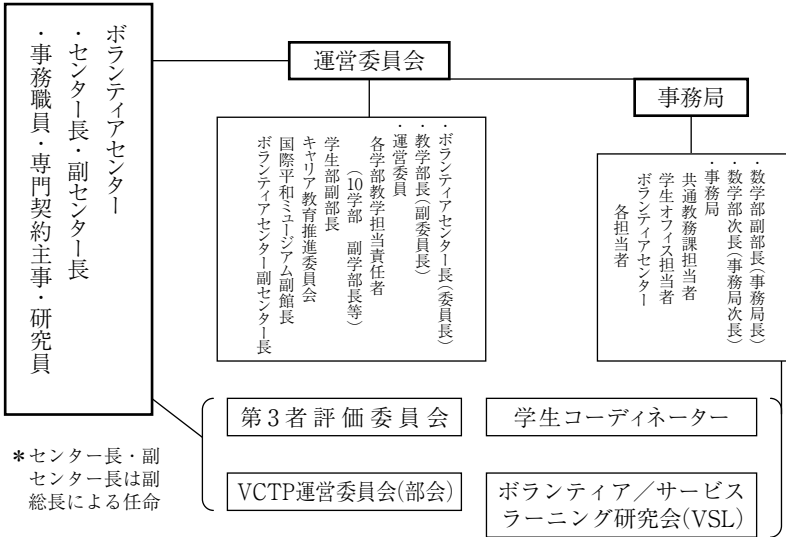
学生コーディネーター制度は、低回生を上回生が、あるいは経験者が初心者を指導援助するなかで、相互が学びあい高めあうキャンパスコミュニティをつくるというという、本学で伝統的に育み発展させてきたピアエデュケーションを、ボランティアセンターの中で具体化したものである。学生コーディネーターは、第2段階のVCTPや地域活性化プログラムなどを学習した学生や課外でのボランティア活動を経験した学生のハイライトシーンとして位置づけた。活動内容は第1段階のボランティアガイダンスや入門講座の企画・運営・支援、ニュースレターの作成、ボランティア環境の整備啓発、第2段階でも正課の「ES」(Educational Supporter 本学の学生教育補助スタッフ制度)として関わること等を期待した。

この第3段階の課題は、ボランティア学習を更に深く学ぶ小集団演習（ボランティア研究ゼミナール）という正課科目の開講である。この演習の開講で、ボランティア学習や活動を支援する側の学生たちの支援活動が、教員もその支援に同行的に参加しながら学びを深めていくような学習場面として再構成されることになる。2008年度に京都・滋賀の両キャンパスで開講準備にかかっているが、先行している学生コーディネーター制度などの課外活動を再帰的に学習場面化することの教育的意義を深めてみたいと思っている。

3. ボランティアセンターの運営体制

ボランティアセンターが開講する正課科目は既に述べてきたように、2007年度で7科目14単位（両キャンパスでシンメトリー配置のために実際のコマ数で言えば14コマとなる）、2008年度には8科目16単位（上記同様にコマ数

図3 ボランティアセンター組織図



でいえば16コマ)となる予定である。しかも、VCTPの演習は両キャンパスで通年計5クラス配置され、地域活性化プログラムも2008年度にはプログラム数に応じてクラス数の増加を検討している。課外活動の支援も含めて考えれば、ボランティアセンターはかなりのボリュームを持った学部横断型の教学セクターになっている。どのような運営体制で執行しているかについてふれておく。体系は図3に示す通りである。

i) 運営委員会

ボランティアセンター運営委員会は、ボランティア教学に責任を負う教学機関であり、ボランティアセンター長を委員長に、全学教学部長が副委員長、事務局長には教学部副部長、委員には各学部 of 副学部長等教学責任者、ボランティアセンター副センター長などによる構成である。年数会程度開催され、ボランティアセンター教学と各学部の専門との調整や接合等についての議論を組織し合意を図る全学の教学機関である。

ii) 事務局会議

事務局会議は、運営委員会での議題整理や資料作成、決定事項の執行管理などを担っている。メンバーは、ボランティアセンター長（兼務）、副センター長 2 人（兼務）、事務局長（兼務）、専任教員（欠員）、事務職員 2 人（1 人兼務）、ポストドクトラルフェロー 1 人、専門契約主事 5 人、である。専門契約主事は、有期制（最長 3 年）の職員枠での配置だが、任用に当たっては「修士以上」という高い専門性を課して、日常実務のほかにも学生の相談、正課科目の補助、関連分野の企画調査、あるいは非常勤講師としての科目担当、など助教的業務を担わせている。日々蓄積されていく専門的知見を有期制という環境下で如何に継承していくか、またそのことが可能かどうか。財政と人的資源の接点で悩ましい課題を抱えている。

iii) 正課科目担当教員

専任教員は2005年度に 1 人配置したが、残念ながら2007年度は当該教員の移籍に伴い欠員となった。科目担当は、VCTPはカウンターパートとの連携プログラムであることから、非常勤講師として連携先に担っていただくほか、主事が非常勤の立場で科目担当している。担当者は専任教員 3 人（但しいずれも学部所属）と研究員 1 人（専任）、非常勤 8 人（うち 2 人はボランティアセンター主事）という内訳である。ボランティア／サービス・ラーニングの本格的展開を想定し、ボランティアセンター教学に直接責任を持つ専任教員配置の検討が進んでいる。連携先にはゲストスピーカーとしてあるいは外部アドバイザーとして支援・協力を頂きながらプログラム内容の精査に取り組んでいる。

iv) 第 3 者評価委員会

現代GPプログラムの第 3 者評価委員会を組織している。メンバーは、京都・滋賀のボランティア関連の研究と実践に造詣の深い委員に加えて、東京からも数人の学識者に就任を依頼し、本プログラムの評価と共に展開方策についての指導助言をお願いしている。委員との真摯な意見交換の中で本プロ

グラムの一層の進化と発展を目指している。

おわりに—Reflective Approach—

さて、今一度、例示してきたような体験的に学ぶ、参加して学ぶ、地域で学ぶ、貢献して学ぶ、等々といったボランティア／サービス・ラーニングが高等教育の前進・発展、学生の学びと成長にどのような貢献をなしうるか。そして講義、演習といった伝統的な教授法とともに高等教育におけるその正当なる位置を主張しうるのか、という問いに戻ってみよう。

私学における学生実態の多様化が語られて久しい。学生実体の多様化は、入試方式の複線化など私学のみならず国公立大も巻き込んだの大学サバイバル時代を反映し各大学の入学政策の結果として具現化され、更に加速化の感を増している。多様化は当初、スポーツ、芸能、文化、海外生活経験、社会人学生など、偏差値だけでは図りきれない多様な能力や資質を持つ学生の存在、というポジティブな語られ方をされてきたが、近年ではむしろ逆に、基礎学力に課題のある学生や心の病を抱えた学生、学習目標が不明瞭な学生、事件事故の当事者としての学生など、ネガティブな実態の背景要因として語られる場面も激増してきた。知識先行で実体験に乏しい学生の抱える課題も学力や生活両面から語られてきた。多様化を意識的に推進してきた当事者として、また多様化を軸に経営基盤を拡充してきた当事者として、ポジネガ輻輳した学生実態をどのように受け止め、如何なる対応を構築していくかは、高等教育関係者にとって社会的責任を問われる共通の課題となっている。今多くの大学で模索しつつある体験型学習もまた、多様化する学生実態に対応し、教育課題に正面から向き合おうとする教育実践の一つであろう。

普遍的真理や正義といった「大きな物語」への信頼や有効性、正当性が著しい揺らぎを見せる中で、私たちが想定している「体験」は、新たな秩序形成に向う具体的で個別・特殊な「小さな物語」への誘いである。プログラム参加の途上で、講義型の教育環境とは異なる、社会への深いコミット感と自己効力感が、学生たちの学びと成長に大きく影響することは相違ない。しか

し、こうした「小さな物語」も万能ではない。直接的な体験が、体験者のこれまでに蓄積された知識や価値の固定化や歪みを更に補強する役割機能もあることを忘れてはならない。ホームレスや高齢者・児童虐待等々社会的排除や暴力、貧困等という形態をとりつつ個別生活が極度に炙り出される今日の社会問題は、往々にして社会を離れて問題体现者の属性・個別性として「体験」され奥深く内面化されるという事例に事欠かない。体験の陥穽である。ここにこそ教育的営みとしての体験学習の課題や意義があるのである。内省・省察・再帰・振り返りなど、この分野の研究実践場面で繰り返し強調されているReflective Approachこそ「大きな物語」と「小さな物語」を架橋し、体験を教育として再構築していく際のキー概念である。Reflective Approach—この豊富化こそ大学における教育と研究の先端分野に位置づく今日的課題である。

【参考文献】

- ・佐々木正道『大学生とボランティアに関する実証研究』ミネルヴァ書房、2003
- ・市村尚久他『経験の意味世界を開く—教育にとって経験とは何か—』東信堂、2003
- ・桜井政成『ボランティアマネジメント—自発的行為の組織化戦略—』ミネルヴァ書房、2007
- ・ドナルド・A・ショーン（柳沢昌一・三輪健二監訳）『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』鳳書房、2007年
- ・本稿の観点から筆者の教育実践をまとめたものに、『障害児の放課後白書—京都障害児放課後・休日実態調査報告—』（クリエイツかもがわ、2004年）・『男が介護するということ』（立命館大学人間科学研究所、2007年）・『男性介護者白書—家族介護者支援への提言—』（かもがわ出版、2007年）がある。学生による障害や介護の課題を抱えた当事者への聞き取り調査をまとめたものだが、障害のある子どもの保護者や男性介護者という当事者の語りを学生が聞き取り、そして改めて学生に語らせるというナラティブプログラムの試作である。

（本章は『大学時報（318号）』（日本市立大学連盟、2008年1月）に寄稿したものに一部加筆したものである）